

学校教育を考える

鈴木 将大（品川区立小中一貫校八潮学園）

都内公立校の講師から始まったこれまでの教職の経歴を紹介した。その中で公立中学校に勤務していた時に取り組んだ教育実践について、また、教員として必要と考える教育に関する視点について発表した。

1 教員時代におけるさまざまな学校づくり

一人の教員が成し遂げることができる教育実践には限界がある。学校は教職員集団による組織であり、多くの教職員と共に協働することができれば、より効果的・効率的な教育実践に取り組むことができる。また、高度に情報化が進み、価値観が多様化した現代に対応する教育実践を進めるためには、地域や保護者など学校外の力を生かすことが求められている。

学校は、その学校の教育目標の実現に向けて、校長のリーダーシップの下さまざまな教育実践を進めている。自らの教育観を深めながら、一人の教員としてどのように学校づくりに携わってきたのか紹介する。

キーワードは、「報・連・相」と「根回し」である。

「報・連・相」は、組織では当たり前のことだと思うが、とくに意識しているのが「完了報告」である。例えば、総合的な学習の時間における新たな取り組みがある場合、上司や同僚と連絡・相談しながら進めていく。上司には進捗状況や途中経過の報告をするが、ある程度見通しがもてると、教育現場の忙しさから最終的な完了報告が上司・部下共に抜けてしまうことが多い。完了報告をすることで、上司からの信頼が増し、自らの実践を振り返る機会となる。また、地域や保護者からの苦情についても、学校での対応後に完了報告をすることで信頼が得られ、苦情が相談に変わっていく。

「根回し」は、ネガティブなイメージがあるが、組織で働いていく上でとても大切なスキルである。賛成してもらえるメンバーから相談という形で話を進め、自らの教育観に基づく実践ができるように進めていく。日頃から「〇〇ができると面白そうだ。」「～と連携すればできそう。」などつつぶやき、味方を増やしていく。上司にも同様につぶやいたり相談したりして、時がきたら資料を作成し上司に提案する。「根回し」は、組織や集団で何かに取り組んでいく際に、物事を円滑に進めていく上で必要なものである。「根回し」を進めていくポイントは、賛成してくれる身近な人から進めていくこと、そして考えを共有できる分かりやすい資料を作成することである。

実際の例として、現在の所属校において、校長の指示を受け進めた地域や保護者を巻き込んだキャリア教育の実践の一部を紹介した。

2 いま求められる力とは

さまざまな分野でグローバル化，高度情報化が進んだことで，私たちを取り巻く環境も文化，価値観，生き方なども多様化している。この先，日本はどのような世の中になっていくのか，世界情勢はどのようなのか，世界の中で日本はどのような役割，責任を果たしていくのか考えてみる。

少し先の将来の日本をつくるのは，現在の子どもたちである。だから教育はとても大切で，教育を通して子どもたちにどのような力を身に付けさせるか考えることは，将来の日本の在り方に通じます。

参加者と共に少し先の日本社会はどのようなになっているか挙げ，いま育むべき力は何か考えた。その力の育成のため，学校教育の中で具体的にどのように取り組んでいくのか，求められる力と学習内容や場面などの表を用いて整理した。

最後に，「生きる力」をはじめ，「人間力」，「社会人基礎力」，「就職基礎能力」，OECDにおける「キー・コンピテンシー」，「21世紀型スキル」などにふれ，いま求められる力について理解を深めた。

3 学力って何だ

OECDが実施しているPISA調査の結果などが発表されると，必ず学力の低下が議論となります。果たして，学力は低下していると言えるのか。

参加者と共に学力が低下しているか否か，その理由を共有した。その上で，教育関連の法の改正により定義された「学力」について押さえ，その定義により整理された現行の観点別評価についてふれた。改めて，先にふれた「生きる力」と「キー・コンピテンシー」などの求められる力について考えた。

4 学力向上に向けて

教員には研修が義務づけられている。研修や研究の中心は，さまざまな授業実践である。これまでの先行研究や研究成果が発表されていく中，それらを自らの実践に上手に活かしていくことは難しいものです。

授業・学習指導の構造を理解し，その構造のどの部分についての研究・実践なのか捉えることで，自らの教育実践への活用方法が，具体的な改善点が見えてくる。

授業・学習指導の構造について説明・紹介した。具体的に「言語活動」，「基礎・基本の定着」，「児童生徒理解」，「ICT活用」などが，構造のどの部分に係わるか参加者と考えた。